

―私の文学館散歩(十)―

水上勉に導かれて京都を歩く

―または、私は何人の美女と巡り会ったか?―

松村 茂治

初めて手にした水上作品

はじめて手にした水上作品は「越後つついし親不知」と思っていたが、あるいは「筑前竹人形」だったかもしれないと不安になり、今回読み直してみても、当初の記憶に間違いないことがわかった。作品の内容についても、読んだ時期についても曖昧だったが、不思議なことに、どこで読んだのかだけは鮮明に覚えている。それは、子どもの頃から学生時代まで住んでいた実家から二、三分の所にあった歯科医の待合室のことだった。そこに置かれていた雑誌に

掲載されていたのである。調べてみると、雑誌は一九六二年(昭和三十七年)発行の別冊文藝春秋だったようだ。昭和三十七年というのは、私が中学三年生のときで、私は決して早熟ではなかったから、読んだのはその数年後、高校生か大学生になってからのことだったと思う。

そこは、一人の女医さんが営む、ちよつと不思議な歯科医院だった。

医院は、大通りから路地を少し入った住宅地の中にあつ

た。医院と言っても、そこは数軒並んだ同じような作りの家作の中の一軒で、看板一つ出ているわけでもなく、どう見ても普通の家としか見えなかった。

診てくれていたのは、S先生という独身の女医さんだった。当時の田舎には珍しい、彫りの深い日本人離れした顔立ちの美人で、いつも真っ赤な口紅を差していたような印象がある。エキゾチックというのは、このような容貌について言うのだろうと思うようになったのは、ずっと後になってからのことである。いやいや、エキゾチックが歯医者をやっているといけないというのではない。その当時は、不思議とは思わなかったが、治療だけではなく、受付から会計まで、すべてを先生一人でやっていたような気がするが、このことは、次の不思議と関連するだろう。

この歯科医は昼間は閉まっています、夕方から夜にかけてのみ営業していたのである。近所の人の話によると、先生は昼間は、市内にあった米軍基地に歯科医として勤務し、そこが引けたあと、自宅に戻って営業しているのだということだったが、真偽の程は定かではない。当時は、表と裏(と言うのはあまり適切な表現ではないが)、平日と休日(ダブルワーキングをしている人がけっこういたように思う。特に、私の育った多摩地区には米軍基地がいくつもあり、そこで働いていた人たちは、この頃から土・日は休

みだったので、週末、アルバイトに精を出している人が何人もいた。だからといって、S歯科医院が、土・日に営業していたという記憶はない。覚えているのは、S先生に診てもらったのは、いつも暗くなってからということだけである。

子どもにとつて、医者はどこも嫌なものだが、行きたくない医者筆頭にあげられるのは歯医者ではなからうか。しかしながら、このS先生の所に行くのは、それほど嫌ではなかったということは、案外私はませていたということになるのだろうか。

近くに他に歯科医がなかったこともあるが、何よりも夜間に診てもらえるということ、近所からは重宝がられていた。これを書きながら思い出したことが、私の父は、配管に関する技術を持っていて、あるとき患者として行った際に診察台の水漏れに気づいて道具を取りに戻り、直しに向いたことがあった。いろいろな意味で、牧歌的な時代だった。

私が大学を出る頃には、S歯科医院は、そこから徒歩十分程のところを家を新築し、遠くからでもそれと分かる立派な看板を掲げて開業したが、私は、この新しい診療所で診てもらった記憶はない。あれから半世紀以上経った今でも、付近を歩くと、S歯科医院の看板が目に入るが、おそ

らく代替わりをしているのだろう……。ああ、歯医者ではなかった、「・・・親不知」の方だった。

この作品は、それほど長い話ではないが、一回の診療待ち時間で読めるものではなく、何回か通って読み終えたものと思う。今回、読み直して、ラストシーンのところまで来て、ああ、この結末だった！と記憶が鮮明になったのだった。

当時、どうしてこの作品を読んでみようと思ったのか、心当たりはない。友人の間で話題になっていたわけでもないし、一部が国語の教科書に載っている有名な作品というわけでもない。調べてみると、この作品は、一九六四年（昭和三十九年）に、監督・今井正、主演・三國連太郎、佐久間良子で映画化されているので、そのときマスコミで取り上げられて話題になり、遅まきながら私も関心を持ったのではなからうか。昭和三十九年なら私は高校二年生なので、映画の評判を聞いて原作を読んでみようということ、大いにありうることである。

この作品のヒロインは、筒石から親不知へ嫁いできた、新妻のおしんである。働き者でいささか男好きのする容姿があだとなって、その身に悲劇が訪れるのだった。

同作家による「越前竹人形」では、福井のひなびた山村

十歳で福井の親元を離れ、京都の寺で得度を受け、二十歳頃までは京都を生活の場にしていた。京都弁は、水上勉にとっては、限りなくネイティブな言葉に近かったのだろう。川端康成は「古都」を出版するに当たって、京言葉を、「京都の人に頼んで直してもらった」と記しているが、水上勉は、登場人物の科白の一言一言を、自力で、正確な京都弁に仕立てていったに違いない。その京都弁が最も効果的に使われているのが「五番町夕霧楼」ではないかと思われるが、この作品については項を改めて述べることにする。

ところで、当初、私は「水上勉」を、「ミナカミツトム」と読んでいた。おそらく、マスコミでもその読み方が一般的ではなかったかと思う。私に、それは「ミズカミツトム」と読むのだと教えてくれたのは、前号に登場した、辻邦生を教えてくれた友人ではなかったらうか。現在広く流布している文庫本の名前には「みずかみつとむ」とルビが振られているが、このエッセイを書くときにしばしばお世話になっている権威あるはずの現代日本文学大系89（筑摩書房）の年表では、「みなかみつとむ」とルビが振られている。出版社が、自社で出版する本の著者名を間違えることはないと思うので、何か意味があつたのかかと思うが、上手の手から・・・ということもあるのだろうか。

に住む竹人形作りの喜助に嫁いだ玉枝という女がヒロインで、彼女は、越前・芦原で遊女をしていたところを見初められ（正確にいうと、彼女を見初めたのは、喜助の父親であった）、喜助に嫁ぐこととなったが、芦原に来る前は、京都で遊女をしていたという設定である。そのことが物語の展開にとつて重要な要素となっているのだが、この点については改めて取り上げることになる。

一言で言えば、二作とも、薄倖な女の人生（その背景にある身勝手な男の一時的な欲情）をテーマにしたものと言える。今回読み返して、いずれもきれいな日本語で書かれているのが印象的だった。意外だったのは、「越前竹人形」では、会話の全てが、ほとんど京都弁で展開していた点である。京都に出自のある玉枝が京都弁を使うのは当然としても、それに合わせるように、福井の山家住まいの喜助の科白も見事な京都弁になっていた。そうしないと、小説としてバランスがとれないということなのかもしれないが、玉枝と喜助だけでなく、ほとんどの登場人物が、京都弁で会話をしていたように思えるので（彼らが使っている言葉を京都弁といつていいのなら）、これは、福井県は京都弁圏であるということを示しているのだろうか。

京都弁の多用ということについては、作者が長いこと京都に関わりを持ってきたことと無関係ではあるまい。彼は、

相国寺・承天美術館

今回の「散歩」を計画するまで、私が読んだ水上作品は、前記の「越後つづいし親不知」と映画化されて話題になった「飢餓海峡」の二作だけであった。このように、それほど熱心な水上ファンでもない私が、この作家を取り上げてみようと思うようになったのは、一年前の京都旅行がきっかけだった。

それに先立つ数年前、知人と京都旅行を楽しんだ妻が、同志社大学の北側に位置する相国寺境内にある承天閣美術館で、伊藤若冲の作品群を見て感動し、テレビの鑑定団好きの私のことだからきつと気に入るだろうと、一年前の旅行の観光コースに組み入れたのである。

地下鉄烏丸線の今出川駅で降り、同志社大学のキャンパスに沿って少し北上して右に曲がると、その先に小さな門が見えてくる。相国寺の西門である。この門に入って直ぐ左手に、手入れの行き届いた庭を備えた建物がある。そこは相国寺の塔頭で、門には柵があつて、一般客は中に入ることはできない。門前の案内板に、京都五山相国寺塔頭瑞春院「雁の寺」とあつた。

テレビの旅番組を見て、水上勉の直木賞受賞作「雁の寺」がどこかにあるということは知っていたが、それがこ

の瑞春院だったということまでは覚えていなかった。そもそも、私は「雁の寺」自体を読んではいなかった。

このとき、つまり一年前の旅では、「そうか、雁の寺はここだったのか・・・」といった程度の感想を抱いただけで、そのまま奥へ進んで相国寺の方丈、開山堂と建物や庭を見て回り、法堂で狩野派の絵師が描いたという鳴き龍の下で、パンと手を打って龍を鳴かせて、承天閣美術館に回ったのだった。

この美術館には、きつと数多くの若冲作品が収められているのだろうと思った。というのは、数年前に妻が来た時には、いかにもこれが若冲！といわんばかりの、色鮮やかな鶏の絵が数えきれないほどあったのだが、一年前の旅で私が目にしたのは、どちらかと言うと地味な若冲が多く、色鮮やかな「鶏」の若冲を推薦した妻としては、いささか拍子抜けだったようだ。

先ほど「鑑定団好き」と書いたが、この番組で教えられたことがいくつもある。その一つが、絵の真贋を見極める鑑定士の目の付けどころで、たとえば、「・・・これは偽物です。本物は、鳥をこんな風には描いていません。これでは、枝に留まっているんだか、滑っているんだか分かりませんねえ・・・」などと言われ、出品作をよく見て、「なるほど、写真というのは細部にまで正確さを求めるも

のなのだ」などと思うことがたびたびある。

しかしながら、この日私たちが目にした、いささか地味とも言うべき若冲、つまり、あのきらびやかな鶏たちではなく、街中の人々の暮らしぶりを描いた、単色の障壁画のような作品のなかに、テレビの鑑定士だったら必ずや贋作と判断するための根拠とするような箇所があったのである。それは、三次元であるべき建物の一部が、二次元に描かれていて、つまり、奥行きというか厚みがなくて、建物としてはあり得ない形になっていたのである。鑑定士流に言えば、「これでは、建物のこの部分には、鳥は留まれませんねえ・・・」ということになるような描き方なのである。妻には、その場でそのことを伝えたが、若冲と深いつながりのあるこの寺に偽物があるはずはなく、私の進言は、にわか鑑定士の戯言と一蹴されてしまったようである。旅行から帰ると益々このことが気になったが、作品名や問題の箇所をメモしてこなかったもので、もう一度出向いて確認しなければ、と思っていたのである。

そうは言っても、先にも触れたように、承天閣美術館には、夥しい数の若冲作品が所蔵されていて、それらを入れて替えて展示しているようなので、行き当たりばったりに行っても、同じ作品に巡りあうことは難しいのではないかと思っていたのだが、手元にあるガイドブックに、この美術

館には鹿苑寺の障壁画が常設展示されているとあるのを見て、ひよっとしたら、私が怪しいと睨んだ作品は、その障壁画かもしれないと気を取り直し、今回、二度目の美術館探訪となったのである。

結論から言うと、この確認の試みは失敗に終わった。目指す作品が見つからなかったというのではない。展示品の入れ替えのため、美術館自体が休館だったのである。やはり、行き当たりばったりではいけなかったようだ。

美術館に入れないのなら長居は無用と、この日来た道を戻りかけ、間もなく瑞春院にさしかかるといふ所で、この寺に住む鬼にイジワルをされたのである。若冲の作品のあら探しをしようとしたことに対する天罰かとも思ったが、この顛末については後述することにして、瑞春院について記しておこう。

瑞春院

相国寺の塔頭である瑞春院は、水上勉が得度を受けた寺であり、直木賞受賞作「雁の寺」の舞台になった寺ということだが、これについては若干の説明が必要である。

水上勉自身の手になる魅力的な京都案内「私版京都図絵」（以後、図絵と略記）には、以下のように記されている。

ここは、私が出家した寺である。若狭から十歳の時に入寺して、当時の住職山盛松庵和尚の弟子になり、ここで得度式をあげてもらい、名も集英となった。室町小学校（室町上立売を上った地点にあった。）五年生に入学、尋常科を卒えると、紫野中学（般若林の後身）に入学し、十四歳までいた。思い出のつきない寺である。いろいろな小説や、随筆にも書いたもので、私にとって、文学的にもここは根っこのようなものももらった寺というしかない（図絵50頁）。

瑞春院は、作家水上勉の出発点となった寺ということ、作家にとって、ここは記念すべき寺と言うことになるが、寺にとってこの作家は、いささか迷惑な存在だったのではないか。

一年前、初めてこの寺を訪れたときには、門前の案内板に「瑞春院 雁の寺」と書かれているのを見て、「ああ、ここが舞台だったのか・・・」と思った程度だが、今回、その小説を読んでからやって来たので、その由緒書きの最後に、「直木賞受賞の名作『雁の寺』の舞台として有名であり、作家の水上勉氏が雛僧時代を過ごした禅院である」と、堂々と書かれているのを見て、違和感を抱いたという

か、これはこの寺のために書かれたものではなく、京都観光のために書かれたものであることを確信したのである。なぜなら、小説「雁の寺」は、物欲色欲に長けた和尚が、それが元で殺されることになるといった話で、もちろん、作品には「瑞春院」とは書かれていないし、時代も昭和のはじめの頃の話ということになっているが、舞台とされた寺にとつては名誉ある話とは思えないからである。作者自身、「・・・私は相国寺内のお坊さんたちには、迎えられざる客である。先年、私の作品を劇化したいために、ある演出家が、本山見学を申し込んでことわられている。(中略)なぜか私は、きらわれているらしい・・・」(図絵63頁)と述べている。

「・・・きらわれているらしい・・・」と、他人事のよきな書き方をしているが、作品を一読すれば、それは当然のことで、作家自身、そうなることは十分想定していたはずである。換言すれば、自分の播種期について、その関係者たちから嫌われるような描き方をしなければならぬほど、作家は屈折した思いを抱いてその時期をすごしたということである。

十歳の水上少年が、若狭の田舎から京都の寺にやって来たのは、ひよつとしたら口減らしのような意味もあったのかもかもしれないが、将来を囑望されての事だったとも思われ

る。現代日本文学大系(89)の年譜には、「小学校時代の成績が優秀だったため、若狭の殿様が奨学金をくれたから」とあり、上京した翌年には、瑞春院で得度を受け、そこから学校に通わせてもらっている。住職にしてみたら、自分の後継者と考えていたのではなかるうか。しかしながら、水上少年は十三歳になると、突然、瑞春院を脱走することになる。

当時の、我慢ならなかった生活について、作家は、いくつかのエピソードを紹介している。

「・・・妻子を溺愛するあまりに、小僧の私をこきつかう和尚への不満が高じた」(図絵55頁)とあり、こき使われ方の例として、たとえば、病床にあった和尚に代わって、檀家回りの責を果たさなければならなかったこと、また、一足先に銭湯に行っている住職の細君のもとに、生後間もない赤子を届け、洗い終わるのを女湯の隅で待つ、洗い終えた赤子を背負って帰って来ること、冷たい井戸水で、オムツ洗いもしなければならなかったことなどをあげている。こうしたことについて、「・・・いったい、十一歳ぐらいの子におむつを洗わせる和尚も奥さまもひどいではないか。子供心に、私はこれを禅門小僧の日課にする和尚夫妻を恨んだ」(同56頁)とある。井戸の水が冷たいと言って泣く水上少年に対して、和尚は、早起きをすれば井戸水

は温かいと言ってしかりつけるのだが、「そんなことをいう和尚をますます恨んだ」(同57頁)、そして、「こんなぐあい、私の中に生じた和尚夫妻への憎しみは、中学校へ入るにしたがって高じ、とうとう、二学年の三学期に、瑞春院を飛び出して帰らなかった。約四年間の徒弟生活だった」(同57頁)としている。

今となってみれば、そのお陰で、我々は水上作品を味わうことができるのだが、当時のことを子細に及んで書かれるのは、たとえ創作とは言え、寺にとつてはありがたくないことである。恨み、憎しみを抱いた作家は、「『雁の寺』というような小説を書いて、和尚殺など空想してみたい」(同63頁)とさえ記している。門前の案内板を見たときに抱いた違和感は、この作品には屈折した水上少年の心境が反映されているのだらうと思つたからであり、敢えて、ここ瑞春院は、あの有名な『雁の寺』の舞台ですよと寺が書いたとすれば、それはまるで自虐行為ではないかと思うからである。

そこで、私は、相国寺法堂で鳴き籠の案内をしていた寺男に、この寺の入り口にある瑞春院の看板に、「雁の寺」と書かれているが、ずっと前から、つまり、雁の絵が描かれた頃からそう呼ばれているのか、聞いてみたのである。

答えは明瞭で、そこが「雁の寺」と呼ばれているのは、雁の絵が描かれたからではなく、水上勉が小説に書いたのでそう呼ばれるようになった、とのことだった。このとき、寺男は「みずかみつとむ」とは言わず、「あの男が」と言ったのだった。水上勉本人だけでなく、通りすがりの私も作家・水上勉はこの寺では嫌われているということを実感した次第である。

衣笠・等持院あたり

今では、「雁の寺」と言えば瑞春院ということになっているが、これは小説が当たってからのことだということが分かった。作者自身、「玄関にある大きな『衝立』にも雁がえがかれていた。昔のものだった。どうして瑞春院に雁の絵が多かったのだろう。現住職にきいてみても答えはなかった」(同62頁)と述べているくらいだから、もともと「雁」はそれほど有名ではなかったと言ふことである。そして作家は、刊行されれば、その内容が問題視されることを見越していたのであろう、小説の舞台を、瑞春院から少し離れた所に設定している。

また、里子(住職の内妻)は、孤峯庵(小説の舞台となつた寺)は京都のどの寺よりも好きであった。衣笠山

のなだらかなたたずまいを起き伏しに見てすごせるのも魅力であったし、甘柿や、ぐみや、琵琶に囲まれた寺の庭も好きでならなかった。(雁の寺21頁)

作品の舞台となる孤峯庵は、架空の寺である。衣笠山を見渡せる所に、このような名前の寺はない。ただし、慈念が(水上少年も)通っていたという紫野中学校を地図上で探していて、かつて中学校があった近くに孤峯庵と名のついた寺院と庭園があるのに気づいた。作家はこの寺の名称の「篷」の字を「峯」に変えて拝借したのではなからうか。内妻の里子についても、若干の説明が必要であろう。彼女は、寺の襖に雁の絵を描いた絵師・岸本南嶽の愛人という設定で、南嶽は死ぬ間際に「和尚さん、さとをたのんますよ。あれは、孤峯さんの娘や」と言って、里子のことを憎からず思っている住職に、自分亡き後の里子の世話を頼んだのである。いや、里子に住職の世話をさせたと言うべきか・・・簡単に言えば和尚に譲ったのである。

里子については、こんな記述がある。

三十二だが、小柄で、ぼつちやりとしており、胴のくびれた男好きのするタイプで、かなり美貌であった。(同12頁)

後者の記述から、孤峯庵から白梅町に出るには、等持院を横切るようにして行くことになるらしい。

等持院山門を入れて百メートルほど行った所に比較的広い墓地があり、その外れに「マキノ省三先生像」と記された銅像が立っているの、この辺りに映画にまつわる何かがあったことは想像できる。

調べてみると、マキノ省三は、「日本映画の父」と言われた人で、俳優の長門裕之・津川雅彦兄弟の祖父ということである。そのマキノが所持していた撮影所が、等持院境内にあったというのだが、その所在地は、その広さから見ても、現在その一隅に銅像が立つ墓地の辺りと考えるのが妥当だろう。

この像に関しては、地面から随分と高いところに設置されていることが気になるのである。まるで、屋根の上に立って、遠くを見つめているかのような感じがするのである。石の台座に彫られた「マキノ省三先生像」の文字を読むのにさえ、顔をかかなり上に向けなければならぬのだが、立像の顔はその遥かに上に位置する。ネットに出ている写真は、おそらく望遠レンズを使っているからであろう、美男の造作まで見ることができるが、肉眼では難しい。それどころか、首をそれだけ上に向けていること自体、苦痛である。

銅像と言えれば上野の西郷さんだが、西郷さんはこれほど高

孤峯庵の所在地について、衣笠山が臨めるとあったが、その場所をもう少し特定できる記述がある。その一つは、慈念が、孤峯庵から大徳寺に隣接する紫野中学に向かう場面の描写である。

慈念の日課は、朝五時起床。洗顔。勤行。飯炊き。それがすむと。庫裡の台所に菓座を敷いて朝食。八時半に寺を出て、山道から鞍馬口に出る。千本通りを通り、北大路の大徳寺の西隣にある紫野中学に通う。この中学はもと禅林各派が徒弟養成のために経営した「般若林」が学令によって中学になったもので(中略)午前中に授業はすんでしまう。慈念は校舎を出ると、すぐ衣笠山に向かつて帰ってくる。(同27頁)

もう一つは、住職の使いで、今出川千本にある檀家に行くところの描写である。

孤峯庵から、等持院の裏林に出て、東亜キネマの撮影所のわきから、白梅町に出た。北野天神をぬけて、上七軒を通ればすぐ千本今出川であった。(同75頁)

い所には立っていないなかったのではないか。きっと、この銅像は見上げさせることに意味があったのだと思う。渋谷の、忠犬ハチ公くらいの高さでは、可愛がられることはあっても尊敬してもらえないのかもしれない。

ああ、道草を食ってしまった。撮影所ではなく孤峯庵の在り処を特定したいのだった。

白梅町に出るには、この撮影所脇を通って行くというのだから、孤峯庵は山門を入ってもう少し先、現在の立命館大学と路地を挟んで隣接する功運院あるいは仙寿院の辺りを想定していたのではなからうか。この地が作品に描かれた頃には、まだ立命館大学衣笠キャンパスはなかったから、里子が言うように、そこからなら衣笠山の稜線を麓まで見渡すことができたと思われる。孤峯庵の位置をここに定めれば、孤峯庵(仙寿院あるいは功運院)↓等持院↓東亜キネマ↓白梅町↓北野天神↓上七軒↓千本今出川と、この日の慈念の足跡をなめらかに辿ることができる。

そもそも、等持院は、水上少年が、瑞春院を脱走した後しばらく身を寄せていた寺院ということもあり、作家は、この辺りには大いに親しみを感じていたようである。

私が、この寺の徒弟になったのは十四歳の時で、それ

までいた相国寺内瑞春院を脱走して、しばらく玉龍庵にいたのを、若狭の遠敷郡矢代村の海泉寺の住職の世話で入った。海泉寺住職は柳沢承碩といい、等持院の出身で、当時の住職二階堂竺源師の弟子であった。(図絵78頁)

だったのが、ここも埋められて、いまは立命館大学の校舎が高く混みあっているため、衣笠山は、方丈裏の縁から眺めても、借景のすばらしさがなくなった。(同79頁)

寺はずいぶん荒廃していたが、現在(一九八五年頃)よりも風格があった。山門から中門にいたるアプローチが美しかった。両側の土塀から巨松が枝をさしかわし、なだらかな坂道が、瓦ぶきの中門に吸われて、その門も四本柱が虫喰いもあらわで、かたむいていた。この中門は、現在は取り払われて、コンクリートの塀と門になり、途中の坂は、土塀が消え、人家が建っている。(中略)中門を入ると、左手に聖天池とよばれるかなり広い池があった。(中略)このあたりも、いまはなぜか埋められて、造成地になった。右手は広い松林で、遠くに庫裡のそり棟と、方丈の建物が、土塀をめぐらせ、うしろに衣笠山を形よく屏風のようにみせて浮き上がっていたが、この松林も切り売られ、一般の墓地になってしまった。したがって、往時の幽邃さは失せ、ただの町なかの寺院である。

庫裡のうしろには、茶畑が遠く衣笠山までのび、二つの池があって、一つは寺院内裏庭の芙蓉池の水とり口

と、ここで、孤峯庵の位置を特定するためのもう一つの記述には、少し分かり難いところがある。孤峯庵の位置を、先の推測にもとづき、等持院の西隣りとする、そこから大徳寺西隣にある中学校に向かうにはどうするのが合理的かと考えてみた。文中にある「山道」というのは、現在の「きぬかけの道」を指しているものと思われる。もちろん、今のよう

車が通るように整備されるずっと以前のことである。この山道を辿って金閣寺の先で北大路通りに入って東進し、大徳寺に向かうというのが最も無駄のない行程である。分かり難いのは、この行程についての記述の中に「鞍馬口」とある点で、私は、これは「鞍馬口」という地域名ではなく、「鞍馬口通り」ではないかと考えている。そうすれば、きぬかけの道↓鞍馬口通り↓千本通り↓北大路通りと矛盾なく進むことができるからである。

鞍馬口と言われてまず思いつくのは、地下鉄烏丸線の「鞍馬口駅」である。この鞍馬口駅の一つ京都寄り駅が「今出川駅」で、そこは水上少年が過ごしていた瑞春院の最寄り駅ということになる(もちろん、当時、地下鉄はなかったが)。瑞春院から大徳寺の中学へは、鞍馬口(このような呼称の地区があったとして)を経由して行くことになっただろう。それでうっかりしたのではないか。あるいは、「鞍馬口」と言えば、それは京都人にとって、「鞍馬口通り」を指すものと決まっていたのかもしれない。

地図にない町

水上勉に、「五番町夕霧楼」という作品のあることは知っていた。それが、京都の遊郭を舞台にした物語であることも金閣寺の炎上を取り上げていることも、何かで読んだ

記憶はあるが、作品自体は読んでいなかったもので、この散歩の機会に読んでみることにした。そして、意外なことを発見したのである。この作品の主人公は、五番町夕霧楼の遊女、片桐夕子である。この名前を見て、おや!と思ったのは、私の学生時代、斜陽になりつつあった日活映画の起死回生を目指して企画された「日活ロマンポルノ」と称される一連の作品が世間を賑わわせていて、そこに名を連ねていた役者の中に、片桐夕子という女優がいたのを覚えていたからである。私は、ロマンポルノは何本か見たが、残念ながら、片桐夕子主演の作品は見た覚えはない。映画は見てもいないのに、女優の名前は覚えていたというのは、その女優がなにか特別な取り上げられ方をされたからだと思うが、それが何だったのか・・・ひよっとしたらその名前の付け方だったのかもしれない。小説の発行が一九六〇年代、ロマンポルノは一九七〇年代のことだから、小説の主人公の名前を映画女優が拝借したとしても、時間的に矛盾はないが、はたしどうだったのだろうか?

この作品の中で、作者は五番町について以下のように記している。

五番町は、京都人には「ゴバンチョ」と少し早口でよ

ばれる語調をもった、古い色街である。
 詳述しておく、西陣京極のある千本中立売から、西へ約一丁ばかり市電通りを北野天神に向って入った地点から南へ下る、三間幅ほどしかない通りである。この通りは丸太町まで千本と並行してのびているが、南北に通じるこの通りを中心にして、東西に入りこむ通りを含めて、凡そ二百軒からなる家々は軒並み妓楼だった。(五番町夕霧楼23頁)

普通の市街図で探せば、五番町は、千本通りと中立売通りの交差点の南西辺りに位置していることは分かるが、近くに取り立てて観光名所はないので、ほとんどの観光地図では割愛されてしまっている。五番町から少し北に上がれば、北野天満宮や大報恩寺(千本釈迦堂)、そこから東に道を辿れば清明神社や西陣織会館(夕子を身請けしようとしたのは、西陣の帯問屋の旦那だった)、南に下がれば、神泉苑、二条城と、五番町は名所に囲まれた空白地帯のようになっている、私が京都旅行で重宝しているガイドブックにも、五番町の名前は、地図にも索引にも出ていない。つまり、観光客はまずやっつけない場所ということである。等持院界隈で孤峯庵の所在地に想像を巡らしたり、マキノ省三先生像の高さに驚かされたりした日、観光地図の他

かもしれない。成人映画を上映しているようだったが、もちろん日活ロマンポルノではないだろう。

この作品では、金閣寺の炎上を取り上げていると書いたが、三島由紀夫の「金閣寺」が、寺に火を放った僧侶の立場から書かれているのに対し、「五番町夕霧楼」は、夕子が、その僧侶の幼なじみだったという想定の下、彼女の視点から書かれている。もともと、金閣寺の炎上が、この作品の主たるテーマではなかったもので、取って付けたような印象を免れなかったが、水上には「金閣炎上」というノンフィクションがあるので、これと三島の「金閣寺」を読み比べてみるのは面白いのではないかと思った。

花街・島原

島原といえは角屋すまやといわれているが、角屋は揚屋の代表で、そのほかに輪違屋りんぢやなどは置屋としての古い家だ。そうした寛永かんえいいらいの歴史を秘めて今も大門をもち、周囲に土塀と掘りをめぐらしたこの一郭は、近世の町人階級の不夜城であった。(中略)島原には、嵯峨本の世界にゆかりふかい光悦も現れた。佐野紹益と名妓吉野太夫との交情は、あまりにも著名だ。(京都201頁)

に、上京区のグーグルマップのコピーを持っていたので、北野白梅町の駅前で一休みした際に五番町を確認し、それほど遠くないと踏んで、足を向けたのである。

西大路通りを少し下がりすぎってしまった私たちは、いくつかの路地を経由して、と言うより、あみだくじを辿るように北上して千本中立売の交差点にたどり着き、そこから北野天神の方に進んで六軒町通りで左折し、それらしき所に迷い込んだのだった。

旅に出る前に見ていたネット情報によれば、昔、遊郭として使われていた建物が残っているとのことだったが、路地をいくつか行ったり来たりしてみたものの、それらしい建物を見つけないことはできなかった。路地を歩いていると、格子窓のある建物が何軒もあり、場所が場所だけに、それらはみなそういう営みに供された建物だったのではないかと、思ってしまうが、その新しさから言っても、そんなことはないのだろう。

帰ってからネットを見直してみると、目指した建物は二〇〇〇年頃の写真ということだったので、その後取り壊されてしまったのかも知れない。路地をさまよっているうち、気がつく、「千本日活」と看板を掲げた映画館の前を歩いていた。色街の名残としてはいささか素っ気ないが、これが往事につながる数少ない建物の一つということになるの

五番町巡りが不発(?)に終わってしまったからと言うわけではないが、五番町からの連想もあって、前から気になっていた島原をのぞいてみようと思ったのだった。

京都に、島原という遊郭があったということは、引用した「京都」以外にも、何かで読んで知ってはいたが、特に遊郭に興味があったわけではないし、近くに有名な神社仏閣があるわけでもないのに、今まで足を向ける機会がなかった。

ここを訪れた日は旅の最終日で、先に触れたように、相国寺で鬼に痛い目に遭わされ、その後始末に時間を取られて、帰りの列車までの時間が中途半端になってしまった。そのため、京都駅から山陰線で二つ目が最寄り駅という島原は、帰りの新幹線の時間を気にしながらの旅行者には好都合な観光スポットということになった。

「角屋おもてなしの文化美術館」というのが、この日私たちが訪れようとしていた施設の名称である。ガイドブックから、そこが江戸時代の揚屋(大型宴会場)の建物や部屋、調度品、庭園などを見せる所らしいということが分かったが、「おもてなし」と名づけられている意味がよく分からなかった。また、記事の中に「二階の見学は要予約」とあったが、急に決めたことでもあり、もちろん予約はしていないかった。

丹波口駅を出て、千本通りを十分ほど下がって路地を入った所に、かつて不夜城を誇ったという、木造格子作りのそれらしい建物が見えて来た。玄関を入ると入場券の自販機があり、その前で財布を出してまごまごしていると、係員がやって来て、「二階のガイドが始まる場所なので、急いでください」と言う。「二階は予約が必要と聞いているけど、予約はしていないので・・・」と答えると、「今、二階の見学料を払えば、大丈夫です」と言うので、言われるがまま、一・二階通しの入場券を買って大きな急階段を上がって行くと、二人の先客を相手にガイドが説明を始めたところだった。

その説明によれば、私たちが立ち止まって見学しているこの部屋では、連日・連夜宴会が催されていたとのことである。そして、客たちをもてなすべく、会場となった部屋の天井、壁、襖、建具などにはさまざまな意匠が凝らされ、どれも重要な文化に指定されているというのだが、ここは遊郭として使われていた所であり、遊郭なら男と女が交わる所のはずだから、そういう場所と重要文化財を結びつけることがなかなか出来ないうた。

欄間や柱、障子の棧など、どの一つをとっても、言われなければ見過ごしてしまいそうな、気づいても説明を聞かなければ理解できないような工夫が凝らされ、「二階は要

ツトにも強調されている。

明治以降の歓楽街は、都市構造とは関係なく、業務内容で「花街」と「遊廓」の二つに分けられました。「花街」は歌や舞を伴う遊宴の町であり、一方、「遊廓」は歌も舞もなく、宴会もしない、歓楽のみの町であります。島原は、困窮的な都市構造でしたが、業務内容は歌舞音曲を伴う遊宴の町で、単に遊宴だけを事とするものではありません。島原の町は、和歌俳諧の文芸活動が盛んで、江戸中期には島原俳壇が形成されるほどの活況を呈しました。(島原のQ&A)

また、江戸の吉原との違いについては、

吉原は江戸時代、俳壇や歌壇が存在するなどということもない、歓楽専門の町でありました。明治以降も歌舞音曲を必要としない業務であったため、歌舞練場を持っておりません。したがって、吉原は都市構造上からも、業務上からも、まぎれもなく「遊廓」ということになります。(同)

さらに、太夫と花魁のちがいについては、

予約」の意味がやつと呑み込めてきたところだが、残念なのは、部屋自体も置かれた調度品もロウソクのすすで黒く煤けてしまっている点である。もらってきたパンフレットに「室内を明るくするために、たくさんのお蝋燭を灯すことが必要でした。(中略)ちなみに、角屋を訪れた司馬江漢の日記には『燭台數十、昼の如く照らす』とあります」とある。電気のない時代のことだから仕方がないと言えばそれまでだが、もう少し修復できないものかと思う。

現在、この美術館は「角屋保存会」の手によって運営されているようで、説明に当たっているガイドたちは、その職員(おそらく、ボランティア)と思われるが、この維持管理は、入場料だけでは賄いきれないのではないかと。建物や調度品が重要文化財に指定されたり庭園が京都市指定名勝に指定されたりしているが、パンフレットにあるように「島原は公認の花街であったが、立地の悪さから次第に寂れ、町中にある非公認の祇園などが大いに栄えた」のと同じ道を進むのではないかと、余計な心配をしてしまう。

ガイドの説明を聞いて印象に残ったのは、建物や調度品の意匠についての説明よりは、花街と遊郭の違い、太夫と花魁の違いに関するもので、彼らは、ずいぶんこの違いに拘っていたように思うのである。このことは、パンフレ

大夫は傾城(官許により、遊宴の席で接待する女性)の芸妓部門の最高位となります。(中略)大夫は舞や音曲のほかに、お茶、お花、和歌、俳諧などの教養を身につけていました。ところが、花魁は芸を披露しないため、歌舞音曲を必要としません。まさしく娼妓部門の最高位となります。(同)

今まで、花街と遊廓、太夫と花魁の違いなど考えたこともなく、上記のように説明されれば、そういうものかと納得せざるをえないところだが、私が開東の人間だからだろうか、島原はもっぱら首から上、吉原は首から下(主に下半身)といった分け方をされると、果たしてそうだろうか、疑問が頭をもたげてくる。

例えば、先に引用した「京都」の十二章には、「この不夜城が出来上がったのは、寛永十七年(一六四〇)この遊廓が六条柳町からこの土地に移転した時にはじまる」とあり、この章の扉には、「廓」と書かれた提灯が、島原の大門に掲げられている写真が掲載されている。「廓」とは、広辞苑に「多数の遊女屋の集まっている一定の地域。いろざと。いろまち。くるわ。」とあるので、元々は、花街と遊廓の区別はしていなかったということなのか、島原には

いわゆる遊郭もあつたが、この角屋は特別な存在だったということなのか、それとも、太夫は、歌舞音曲や和歌、俳句も提供するが、純粹な歓楽も提供したということなのかあるいは、説明の中に「明治以降」と断り書きを入れてるので、江戸時代は別だったということを書いているのかもしれない。

このことに関連して、「越前竹人形」にこんな一節がある。越前の山奥に住む竹人形作りの喜助の下に嫁いだ玉枝（源氏名・園子）の所へ、偶然にも、旧知の京都の人形問屋の番頭（忠平）が訪ねて来た件である。

「あんたは若い、ちつともかわらへんなア」

忠平は何だめかの感嘆の声をだした。じっさい、忠平はたまげているのである。島原遊廓で園子と名のり、妓楼「山陽」にでていたころは今のようむつちりと肥えてはいなかった。丸顔で、均整がとれている園子には、客がひっきりなしにあつた。中書島の家をとび出して、娼妓になりそめて三日月目に忠平は馴染みになっている。

（越前竹人形 234頁）

中書島というのは、伏見にあつた遊郭の名称である。

この後、「島原をやめて・・・それからまた島原イもど

りましたんや（中略）あいかわらずの娼妓です」と、身の上話が続くが、明らかに、島原にも娼妓がいたということになっている。ここ島原には、角屋のように歌舞音曲によるもてなしをする店もあつたが、もっぱら歓楽のみを提供する店もあつたということになるのだろうか。

季節々に、分かつたような顔をして、あちこちの神社仏閣を訪ね歩いていますが、神様にも仏様にもそれほど馴染みがあるわけではない。それ以上に、花街も遊郭も私にとつては無縁の世界である。それにも拘わらず、この「おもてなしの文化美術館」に親しみを感ずるのは、普通、芸術の鑑賞といえは、美術館でガラス越しに、あるいは手を触れないようにして作品と向き合うのに対して、ここでは、普段の生活の中で人々を喜ばせてきた作品を、それが元々あつた所で見ることが出来るからかもしれない。自分の気に入った品々をそろえて客を迎える・・・おもてなしというのは、そういうことをいうのだと理解した次第である。

寺で鬼に遭い、街で仏に会つた話

さて、散歩の最後に、お寺には仏ばかりではなくときに鬼も出没すること、そして渡る世間には仏もいるということをお伝えしておこうと思う。

先にも触れたように、今回の散歩の目的の一つは、相国

寺にある承天美術館で展示されている若沖の障壁画のなかに、立体図として不自然なところがあつたのではないかと気になり、それを確認することであつた。それに、相国寺には小説「雁の寺」の舞台となつたといわれている瑞春院があるので、そこを訪れ、水上勉に思いを馳せてみるというのも、大事な目的の一つであつた。しかしながら、美術館は展示品の入れ替えのために休館になっていたのだつた。

美術館に入れないのなら、いつまでもそこで時間を費やす必要はなく、旅の最後日を有効に使うと、入って来たときに通つた参道を戻りはじめたのである。そのとき、瑞春院の案内板をもう一度しっかり読んでおこうと、参道の右寄りを歩いていたのだつた。アスファルトで固められた参道の側溝側が、ややきつい傾斜になっていたからだろう、歩きにくさを感じて、中央寄りに歩みを変えようとしたのが却つていけなかつた。路面の傾斜に靴底が引っかかり、二、三步前につんのめると、勢いよく転倒したのである。転倒と言うより、少し後ろを歩いていて妻は、誰かに突き飛ばされたようだったと言ひ、私は、全身を路面にたたきつけられたように感じたのだつた。何とか、身体をくるつと回転させ、立ち上がったのは、水の流れていない側溝の中だった。

私の叫び声に、すぐ近くで作業していた数人の植木職人

が一斉に手を止め、なかの一人が、「大丈夫ですか？」と声をかけてきてくれた。こちらとしては、何とも無様な格好をしているわけで、恥ずかしいというか面目ないというか、あまりジロジロ見ないで欲しいという気持ちが強かつた。意識はあるし、立ち上がることもできるし、手足も口も動かすことが出来るので、取りあえず「大丈夫です」と答えたものの、「ダ、ダメかもしれないです・・・」と答えるべきだったと、後になって思つたのである。

身体を守ろうとしてついた両方の掌からは血が流れ出ていた。膝も痛かつたが、こちらは殴打だけで、ほとんど出血はしていなかつた。はじめ、私は気づかなかつたが、妻は、顎の傷が深いようだから、しばらくしつかり押さえていて、出血が治まつたら病院に行った方がいいだろうと言ふのだつた。

とつさに両手で身を守つたつもりだったが、アスファルト面につかつた際の衝撃は始めて経験するもので、何度か身体がバウンドしたような感じがした。特に、顎の強打がひどかつた。ボクシングの経験はないが、強烈なアッパーカットをもらうと、こんな感じになるのではないかと思つた。このときは、出血のひどいことは分かっていたが、顎から耳の下あたりにかけて痺れている以外たいした痛みも感じず、耳の中がボーっとするような感じがしたり、顎

の骨が少しずれているように感じたりするようになったのは、もう少し時間が経ってからのことである。

直ぐ近くにトイレがあったので、そこで手と顎をきれいに洗い、取りあえずの応急処置を終えた。掌の出血は、間もなく治まってきたが、顎からの出血は、手拭い一本を真っ赤に染めても、なかなか治まらなかつた。それでも、少し休んで、出血さえ治まれば、旅を続けることはできるのだらうと高を括っていたのだが、妻の見立てはそうではなかつた。スマホを取り出して形成外科の検索を始めた彼女は、京田辺市に一軒あるみたいだと言う。京田辺と言えば奈良との県境の方なので、そこに行くくらいなら救急車を呼んだ方がいいだろうということになり、もう少し探つてもらおうと、事故現場からそれほど遠くない所にクリニックがあることが分かつた。しかしながら、その営業品目には、美容外科、美容皮膚科・・・とあるので、妻は、男の患者はお断りかもしれないけれど、と言いながら、電話をしてこちらの状況を話すと、直ぐ来るようにとの返事が返つて来た。

烏丸通を下ってきたタクシーを捕まえ、行き先を告げたのだが、運転手は、クリニックの正確な場所は知らなかつた。スマホで検索した住所を見せると、間もなく、この辺でしようと言って車を停めた所は、幸いにも、クリニック

と、子どもの頃、魚釣りに使ったテグスのような糸が見えた。ああ、あれでホウゴウするのだと覚悟を決めたのだつた。

施術中、先生たちは、こちらの気持ちをほぐすためだろう、いろいろと話しかけてくれた。麻酔をされているとは言え、一針一針の動きに気持ちを向けるのは、患者として賢明なことではない。「京都には、よくいらっしやるのですか」とか「どちらから来られたのですか」といった、平時ならたわいもない世間話で、気持ちを他へ逸らすには極めて適切な言葉かけと言えるが、私の置かれた状況は平時ではなく、しかも、ホウゴウの対象となつているのは、顎なのである。せつかく話しかけてくれるのに返事をしないのは申し訳ないと思うが、返事をしようとすれば、どうしても顎が動いてしまう。黙って聞き流していいものか、どの程度の動きなら許されるのか・・・。「京都には年に一、二回来ますね」は、それほど口を動かさないとはいふことができたが、「住まいですか？住まいは神奈川県相模原市橋本・・・有名なものは何もないですねえ・・・そうそう、リニア新幹線はご存知ですか？品川が始発駅で、その次の停車駅が橋本なんです。今、駅前で大きな穴を掘っています・・・」は、かなり口を動かしての受け答えだったが、先生方のホウゴウを進める手を止めさせるこ

の入っているビルの入り口の真ん前だつた。

ビルの五階に入っているクリニックは、美容外科に相応しく、明るい照明が、基調としている白をより一層目立たせるような、お洒落な造りになっていた。私は行ったことはないけれど、ここは美容サロンだと言われれば、信じてしまいそうである。分かり易く言えば、顔から血を流したおっさんが来るような所ではないということである。まもなく昼になるという時刻で、待合室には我々の他には誰もいなかったのは幸いだった。

自分自身では、顎の傷口は見えないし、出血もようやく治まってきたので、それほどひどいものとは思っていないなかつたのだが、医師は一目見るなり、「ホウゴウしますね」と言うのである。ホウゴウというのは縫い合わせることだと分かるまで、ほんの少し間があつた。そして、改めて傷はけつこう深いということを知つたのだつた。

ベッドに仰向けにされると、目の前には、テレビドラマの手術シーンでよく見かける、天井から吊り下げられている照明（無影燈と言うらしい）があつて、まるで心臓の手術を受けるような心地だつたが、もはや、まな板の上ではない手術台の上の患者である。顎の周りに麻酔を打たれると、すぐに痛みは感じなくなり、何をされているのかも分からなくなつた。そして、怖いもの見たさに薄目を開ける

とはなかつたか・・・いや、もう縫合は済んでいたのかもしれない。

医師と看護師さんの二人がかりの手術だったので、手術台から起き上がったとき、「かなりの重傷だつたのですね」と尋ねると、「顎の骨まで達する傷でした。十針縫いました。近くに太い血管が切れていなくて幸いでした」との答えが返つて来て、改めて胸をなで下ろしたのだつた。私は、太い血管のことは知らなかつたが、よく舌をかまなかつたと思つたのだつた。また、転んだところが寺の境内だつたことも、そして参道脇の側溝に水が流れていなかったことも幸いだった。これが表通りだつたら、水が流れていたらと思うとぞつとするのである。

転んだ所からそれほど遠くない所で診てもらえたこと、そして妻が言うには、美容外科だけあつて非常に綺麗にホウゴウされていること（残念ながら、私には見えない）なども、幸いであつた。このクリニックは今年六月に開業したばかりだという。私たちは、三月にも京都に来ていたので、もし、転倒が三月だつたら、ここで診てもらうことはなかつたわけだから、これは真正正銘の「怪我の功名」ということになる。

先生も看護師さんも受付の女性もとても感じの良い人たちで、皆さんにエレベーターまで送ってもらつたときには、

スナックからホステスに送り出されているような気分になり、思わず、「また寄らせてもらいます」と口にしてしまったのは、いささか不謹慎だったかもしれない。

その後、少し遅めの昼食をとり、錦小路で土産物を買って駅へ向かったのである。夕方の新幹線までには、少し時間があつたので、先に記した「角屋おもてなしの文化美術館」に寄ることにして、コインロッカーを探しながら新幹線の八条東口へつながら地下通路を歩いていると、こちらを向いてにこやかにほほ笑む若い女性の姿が目に入ってきた。どこかで会ったような・・・というの正しい言い方ではない。それは、今しがた、お世話になってきたクリニックスの案内板で、笑いかけているのはホウゴウしてくれた先生だった。何だか「くれぐれもお大事に」と言われているような気分になり、改めてお礼に行かなければ、と思つた次第である。

補遺（その一）

京都のこのクリニックスには、透視撮影の設備がないので、帰ったら精密検査を受けるようにと、医師は紹介状を書いてくれた。縫合手術を受けていたときには、麻酔をかかけられていたこともあつて、どこが痛いのかよく分からなかったが、時間が経つに連れて、顎の傷よりも、顎のつけ根の

辺りに違和感があり、口のスムーズな開閉が出来ないことが気になつていた。思いつき口を開けてあくびをすることが出来ず、また上下の歯の噛み合わせがずれているような感じがしてきて、素人目にも、詳しく診てもらった方がいいだろうと思うようになってきていた。

言われた通り、透視検査を受けるために、家の近くの病院へ行ったときのことである。紹介状に目をやった医師は開口一番、「こ、この名前の病院ですか？」といささか驚いたような、どちらかと言うと素っ頓狂といったような声を上げたので、少し離れた所にいた若い看護師が駆け寄ってきて、紹介状をのぞき込んだのだった。そうした反応が返って来るかもしれないと予想していたので、私は落着き払って「ええ、その通りの名前なんです」と、答えたのだった。そこには、紹介医師の病院名として、「へいとうらんクリニックス四条烏丸」とあつたからである。つまり、町で会ったホトケ様の名前は、いとうらん先生というのであつた。以来、私のカードケースには、とても病院の診察券とは思えないカラフルな花柄のカードが、お守り代わりに忍ばせてある。

補遺（その二）

京都からの帰り、横浜線に乗り換えるために新横浜で新

幹線を降りて、駅のコンコースを歩いていたときのことだつた。後ろからやって来て、私たちの脇を走り抜けていく

中年の女性がいた。乗り換えを急いでいたのだろうと思われるが、その女性は、私たちを追い越して数メートル行つた所で、突然前につんのめると勢いよく転倒し、動かなくなつてしまった。改札口に近かつたこともあつて、駅員がすぐに駆けつけて来たので、私たち通行人が手を出すことはなかったが、しばらくは自力では立てないような様子だった。一瞬のことで、正確なところは分からないが、かなり激しい転び方に見えた。出血はしていなかったようだが、妻は、頭部を強く打つたので、私より重傷ではないかと心配していた。私は、この日の自分の再現シーンを見ているようで、何の障害物もない真つ平らな所でも人は躓いて転倒するものなのだと認識を新たにしたのである。

参考文献

現代日本文学大系89 筑摩書房 昭和四十七年
雁の寺・越前竹人形 水上勉 新潮文庫 平成二十四年
改版
私版 京都図絵 水上勉 小学館 二〇二〇年
五番町夕霧楼 水上勉 小学館 二〇一六年
京都 林屋辰三郎 岩波書店 一九六二年